



歌川広重が晩年に全国の名所を描いた人気シリーズ「六十余州名所図会」の一図。画面左の墨の濃淡で描きあげた鏡台山と、画面右の月の光に皎々と照らし出された明るいグリーン色の姥捨山との対照は見事である。棚田にうつる一つ一つの丸い月影が印象的で、静寂の中で深々と更けゆく夜の冷気が感じられる絵となっている。(34.6×23.0)

## 7 葛飾 北斎

## 相州箱根湖水



葛飾北斎の代表作「富嶽三十六景」の一図。箱根の山は、「天下の嶮」とよばれる急坂や難所が多いが、箱根の関所を越えたとおらかな自然が広がっている。芦の湖の静かなたたずまいに、丸い山形をした駒ヶ岳、湖水のほとりには箱根神社の森も見え、湖水の向かいには富士山も頭をのぞかせる。穏やかで雄大な自然を感じさせる、荘厳な空気をもった作品である。(26.0×38.3)

## 8 歌川 広重

## 竹に雀



墨の濃淡のみによって描かれた本図は、広重が生涯好んで描いた大短冊サイズの花鳥画である。取り合わせの良いものの例えにも用いられる「竹に雀」の画題を、一竿の竹に一羽の雀を配したシンプルかつ調和のとれた美しい構図で表す。画面中央に描かれた雀は可愛らしさの中にも穏やかな気品を感じさせる。広重の豊かな表現力が存分にうかがえる一枚。(36.5×17.2)

## 4 東洲斎 写楽

## 三代目沢村宗十郎 大岸蔵人



寛政6(1794)年5月都座で上演された演目「花菖蒲文禄曾我」の中で三代目沢村宗十郎が演じた「大岸蔵人」を描いたもの。父親を殺された兄弟の仇討ち話で、大岸蔵人はこの兄弟を助ける捌き役を演じた。黒い雲母の地に、紫一色の着物を着た役者の上半身のみが描かれ、緊張感のある輪郭の曲線や役者の特徴を捉えた顔立ちから写楽の肖像画家としての手腕が見て取れる。(39.1×26.2)

## 5 鳥高斎 栄昌

## 扇屋滝川



栄昌は歌麿と同時代に活躍した絵師で、師は鳥文斎栄之。「大首絵」と称した美人のクローズアップを得意とした。高々と大きな鳥田髷を結い上げた面長美人が描かれる本図は、当代一流の遊女の姿に巧みに流行をうつしている。大きな髷を強調した髪形や、髷につけた絹ちりめん、幅の広いべっ甲製の櫛、麻の葉模様の大柄の絞り染めの小袖など、当時の流行を鮮やかに描き出した一枚である。(39.3×26.5)

## ■ 作品送付方法

作品は台紙付で発送いたします。額縁付作品をご希望の方は¥10,000を同封の郵便振替でご送金ください。(送料は当財団で負担いたします。)

## 1 奥村 彰一



## 【作家のコメント】

私の作品は、山水や園林などに見る曼荼羅的な入れ籠の構造を持つとともに、中国の民間芸術である年画の要素を取り入れています。そこには粗野なまでに純粋な、民衆たちの吉祥への思いが表されています。中国で誕生した年画と日本の浮世絵が合わさったとき、どのような世界が立ち現れるか、作品を通して感じていただけたら幸いです。

当財団が主催するアダチUKIYO大賞の第9回優秀賞受賞作品。独特の画面構成や色遣いは、伝統的な日本画と中国画について深い造詣をもつ氏だからこそ生まれるもので、現代的なモチーフと相まって見る人を自然と惹きつける力を持っている。奥村氏の描いたリズミカルな線と独特の鮮やかな色が伝統木版技術と融合することで、魅力ある吉祥画が現代の浮世絵として完成した。(31.0×24.0)

## 奥村 彰一 【略歴】

1989年 中国、北京市生まれ。2009年多摩美術大学日本画科入学後、2011年に北京の中央美術学院へ留学し、中国画を学ぶ。2017年多摩美術大学美術研究領域日本画専攻修了。現在、多摩美術大学日本画研究室助手。

2015年 Face2016 損保ジャパン日本興亜美術賞 入選

2016年 トーキョーワンダーウォール2016 石原慎太郎賞

2016年 個展 奥村彰一展 -桃源小旅行- (Shonandai MY Gallery/東京)

2017年 第20回 岡本太郎現代芸術賞 入選

2017年 Art Award Tokyo 丸の内2017 フランス大使館賞/今村有策賞/丸の内賞

2017年 個展 奥村彰一展 -洞天風味- (The Artcomplex Center of Tokyo/東京)

2018年 第9回アダチUKIYO大賞 優秀賞

2018年 ART TAIPEI 台北国際藝術博覧會 2018に出品

2018年 個展 奥村彰一展 -園林漫遊- (Imavision gallery/台北)

## 3 今井 鉄朗

## 都会の隙間



当財団が主催するアダチUKIYO大賞の第8回大賞受賞作品。シンプルな線で浮き上がる立体感と構図の面白さが魅力の作品となっている。落書きなカストリートアートなのか、雑然とする繁華街のトイレで煙草をふかしているのは、髪を結った着物姿の女性。様々な価値観が交錯する現代の都会の姿を巧みに切り取っており、画題も現代の浮世絵に相応しい。(34.5×23.0)

## 2 中島 千波

## カトレア



日本画の枠にとどまらずデザインなどの分野でも広く活躍され、特に花を描く画家として親しまれる中島千波画伯。本図は中島画伯が木版画のために書き下ろしたシリーズ「花の瞬間」の一図である。蘭の女王とも呼ばれるカトレアの瑞々しい美しさを、透明感のある色づかいで表している。木版の得意とする繊細な線や艶やかな色彩がカトレアの優美さを際立たせており、まさに現代の浮世絵といえる作品である。(21.5×36.0)